

建築 専攻

設置クラス	芸大系日曜専科 高3生・高卒生	日曜 9:30~18:00
	芸大系高2日曜専科 高2生	日曜 9:30~18:00
	工学部系日曜専科 高3生・高卒生	日曜 9:30~18:00
	工学部系高2日曜専科 高2生	日曜 9:30~18:00



空間の楽しさ、おもしろさ、奥深さへ

小さな頃、ブロック遊びが好きだった。あるいは、お城や教会に魅せられた。あるいは、現代的な美術館や図書館を訪れ、その雰囲気に圧倒された。

こうした感動こそが、美大における建築の研究対象となります。

建築科の実技入試対策とは、こうした空間体験に改めて目を向け、

そんな体験を今度は自分で形づくるための基本を身につけることです。

空間に対する感動の正体を探り、更なるおもしろさを見出すべく、

その第一歩をここで踏み出しませんか。

指導スタッフ

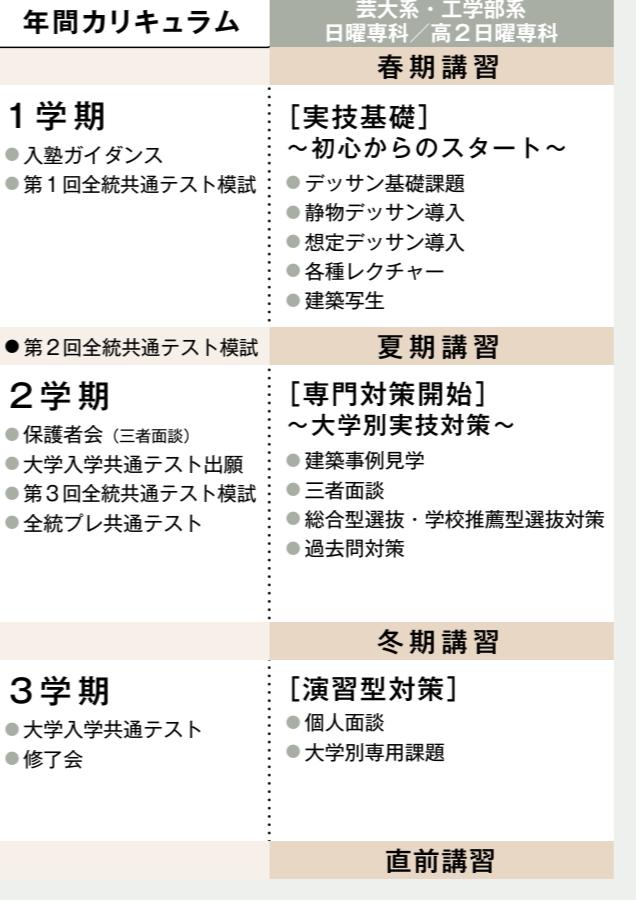
東京芸大の卒業生と現役学生によって構成されたスタッフが、初心からの実技指導にあたります。実績として、東京芸大や京都工芸繊維大など例年多数の現役合格生を輩出しています。

講師

井村 正和 東京芸大建築卒
岡崎 万実子 東京芸大建築在籍
奥川 司 多摩美大建築・環境デザイン在籍
竹内 佑有 東京芸大建築在籍
南中道 優地 東京芸大建築在籍
若尾 和真 東京芸大大学院建築在籍
渡辺 一生 東大大学院修

チーフ

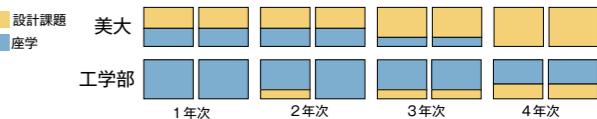
阿部 竜也 愛知芸大彫刻在籍
中根 光駿 愛知芸大油絵在籍



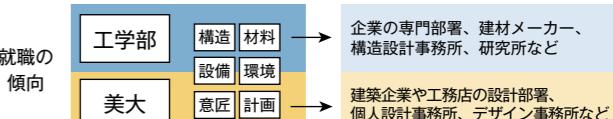
美大の建築への進学について

Q1: 美大の建築は工学部とどう違う?

最大の違いは、4年間の授業編成にあります。美大では設計課題が中心、工学部では座学が中心です。美大では座学と並行して常に設計課題が提出されますが、工学部では設計課題は限定的に提出されることになります。



上の図は、各年次ごとの授業時間の割り当てを示すモデルです。工学部では、3~4年次に構造や材料、設備などを専門的に扱うため、上記のモデルでは設計教育を受ける計画系の研究室に所属した場合を示しています。このような、設計課題と座学にかかる時間の違いは、卒業後にも影響し、工学部の学生の半数は設計以外の各分野に就職していくのに対して、美大の学生のほとんどは設計、あるいはデザインの分野に進みます。



上記の専門分野は工学部、美大どちらにおいても修めます。ただし、工学部では設計系の研究室以外の学生の方が多く、こうした傾向となります。

端的に言えば、「建築」という分野を専門分野に細分化して取り扱うのが工学部なのに対して、総体として統合的に考えていくのが美大の建築です。

Q2: 美大の建築ならではの特徴とは?

美大の建築の特徴は、「作品をつくること」が学びの中核であることです。このため、大学生活の中心が「授業」ではなく、「自ら考え、手を動かすこと」となります。また、他の専攻の同級生もみな、さまざまな形で「ものづくり」にかかわっていることは大きな特徴です。そうした環境で4年間過ごすことは、他の大学にはない刺激となるでしょう。



知識の習得

立方体などの幾何形体をモチーフとして、遠近法のレクチャーなどを行います。



デッサン基礎

単純な形態の組み合わせを通じて、デッサンの基本を身につけます。



建築写生

市内の有名建築の写生を通じて、大規模の描写も行います。



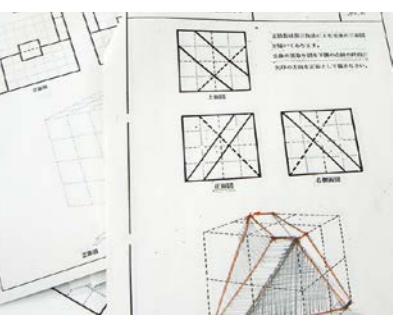
建築見学

近隣の世界的建築家の作品を訪れ、実際に空間を体感します。



大型モチーフ課題

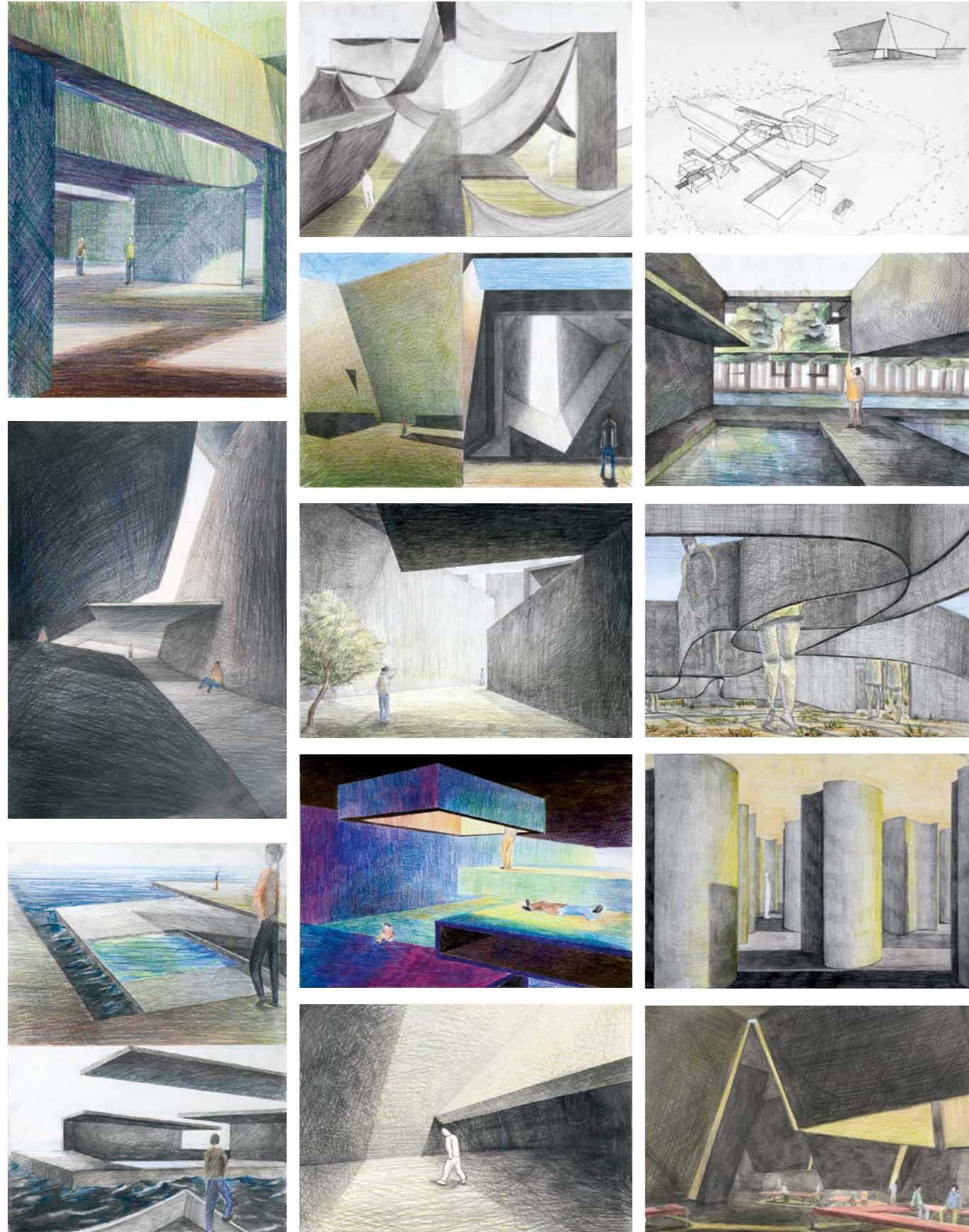
静物モチーフよりも大型のモチーフ描写を通じて、空間表現を追求します。



空間理解演習

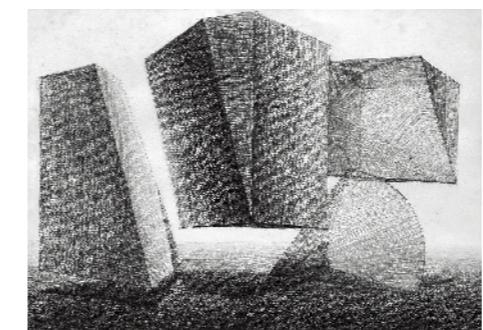
三面図課題などを通じて、異なる形式の空間表現を習得します。

建築専攻での対策は、単に「絵を描く」ことのみならず、「絵を描いて考える」ことや、「絵を通じて伝える」ことを中心に進めます。CAD全盛のこの時代において、そうしたやり方は、一見時代遅れのようでもあります。しかし、絵を描くということは、実際には立体的、空間的な把握力を育て、さらに部分と全体を統合できる力を養うことに他なりません。そうした力は、やがては自在に空間を構想するうえでの不可欠な道具となるのです。建築専攻では、そうした思考のための道具を手に入れる初歩から指導を始めます。さらに、実技指導を通じて、設計に不可欠な思考力、表現力、文章力まで含めて、大学入学後にも周りとの差をつけられる能力を身につけることを目標としています。

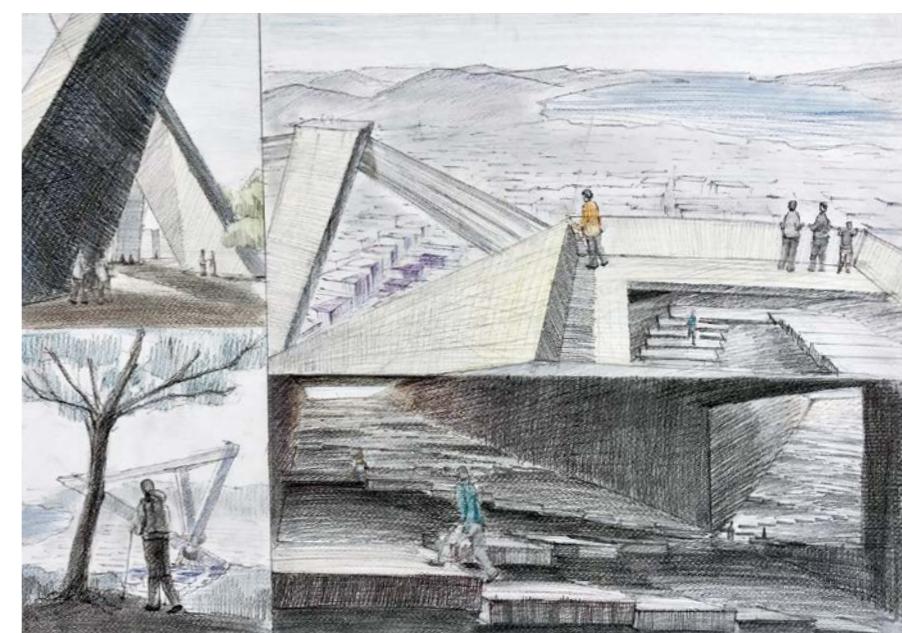


東京藝術大学の合格作品

東京藝術大学では、空間構成（3h）と総合表現（7h）という、2つの実技試験が課されます。空間構成では、条件づけられた形状を正確に描写する技能が問われ、総合表現では課題に対してこうした課題に応えるために必要な技能と構想力とが、入試のみならず大学入学後、さらには社会に出た後にも、豊かな建築を生み出す設計者としての力につながっていきます。



1. 2024年度入試の空間構成課題は、立方体を切断してできる形状の構成でした。この作品では立体のみならず、それらのすき間に生まれる空間のおもしろさが描き出されています。

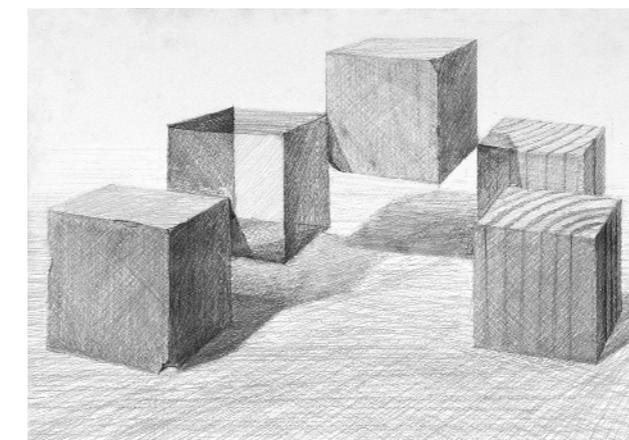


2. この年度の総合表現の出題では、架空の町における架空の体験記を通じて、その町の特徴である塔からなる空間を自由に構想することが求められました。条件づけられた4つの視点それぞれに対して、塔のみならずその周囲の空間の印象を生き生きと伝える作品となっています。発想と具体的な構想、さらに表現までが含まれる、それがまさに「総合」表現なのです。

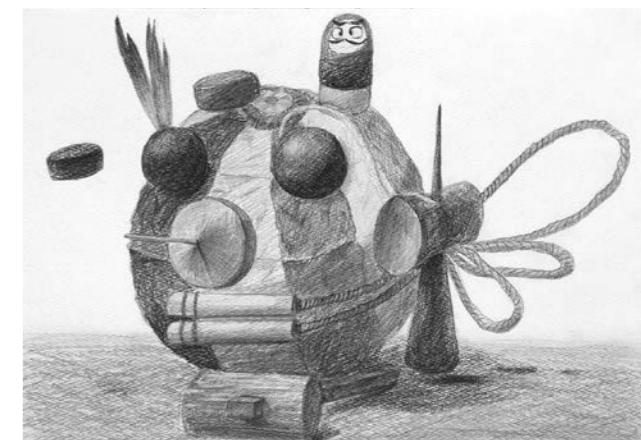
建築専攻入試の実技試験

東京藝術大学のほかにも、実技試験を課している大学があります。代表的なものでは、国公立大学では京都工芸繊維大学、私立大学では武蔵野美術大学などが挙げられます。

大学によって傾向に差はありますが、空間に対する理解力と伝達力という点では、基本的な技能習得をふまえた出題であることに変わりはありません。

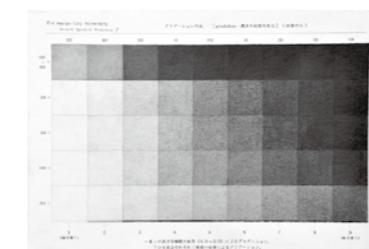


1. 武蔵野美術大学対策の基礎課題です。立方体は、最も単純ながら正しく形態を描写することが難しい立体ですが、この作品ではそれぞれの立方体は正しい反面、同一のサイズに見えるかどうかという点が課題とされました。

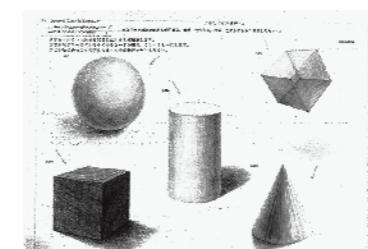


2. 京都工芸繊維大学で過去に出題された、「身の回りのものを用いて人の顔をつくり、描く」という課題の作品です。それぞれのモチーフが何であるのかが明解であり、ユーモラスな構成を着実な描写が支えている作品です。

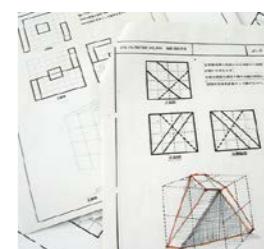
立体表現演習課題: 基本から立体表現を身につける



1. 画材に慣れる。異なる堅さの鉛筆で、どこまで階調をつくることができるかというトレーニングです。画材については、すべて基本から習得します。



2. さまざまな形態や素材における陰影表現の追求。実際の風景を写すだけでなく、光の方向などから論理的に理解したうえで描写するためのトレーニングです。



3. 三面図を用いて、図面から立体物を想像する力を養います。



4. 一方では写真の模写などを通じて、自然な光の印象を表現するための対策も行います。